

広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』（阿弥陀の本地）

天文七年写本 翻刻

広島大学日本語史研究会

一、広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』について

広島大学中央図書館貴重資料室に、広島大学名誉教授故福尾猛市郎氏旧蔵の福尾文庫が有る。この福尾文庫の全体は、位藤邦生編『広島大学蔵古代中世文学貴重資料集 翻刻と目録』（二〇〇四年、笠間書院）所収の「福尾文庫目録」で知ることができる。

ここに翻刻する『善正太子物語』は、福尾文庫第三十一号、天文七年（一五三八）の写本である。表紙・外題・内題・尾題すべて存しないため、書名不明である。今は、「福尾文庫目録」に従い、『善正太子物語』と呼ぶ。

本『善正太子物語』は、阿弥陀の本地・法藏比丘・弥陀の本懐・天竺の物語などと呼称される説話の一本である。伝本は多く（国文学研究資料館データベース「日本古典籍総合目録」、参照）、諸本間の異同が甚だしい。諸本は、以下の文献で読むことができる。

松本隆信編『影印室町物語集成 第五輯』（一九七三年、汲古書院）。横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第一・第十二・補遺一（一九七

三・一九八四・一九八七年、角川書店）。横山重『古浄瑠璃正本集 第10』（一九八二年、角川書店）。松本隆信『中世における本地物の研究』（一九九六年、汲古書院）。『七寺古逸經典研究叢書 第四卷 中國日本撰述經典（其之四）・漢譯經典』（一九九九年、大東出版社）。黒田佳世『阿弥陀の本地』解題・翻刻 仏教文化研究所蔵本と慈願寺蔵本』（同朋大学仏教文化研究所紀要）20、二〇〇一年三月。

この善正太子物語は、「阿弥陀の本地」または「法藏比丘」として、奈良絵本にもされ、広く読まれた。その一本の全文を、慶應義塾大学「世界のデジタル 奈良絵本データベース」で閲覧可能である。

また、「阿弥陀の本地」と『今昔物語集』『往因類聚抄』『大乘毘沙門経』との関係も指摘されている（今野達「今昔物語集卷五第廿二話伝承の展開 1・2」『国語』第五卷二号・二号、三号・四号。一九五七年四月、七月）、『今野達説話文学論集』（二〇〇八年、勉誠出版）に所収。徳田和夫『お伽草子研究』（一九八八年、三井書店）。本田義憲「解説「辺境」説話の説」（『新潮日本古典集成 今昔物語集本朝世俗部 二』一九七九年、新潮社）。本福尾文庫本文では、善正太子の生国が西上国（西城国）・夫人の生国が東上国（東城国）、太子が城を出てすぐに、太子の母は嘆き

のあまり亡くなり、西上国に到着した太子が宿で笛を吹く。松本隆信の分類では、乙類（B類）本に当たる。

右の参考文献で知られる乙類諸本中、福尾文庫蔵『善正太子物語』は、現存最古の写本である。

しかし、「福尾文庫目録」に掲載されるのみで、これまで、「阿弥陀の本地」の一本として、本書が紹介されたことは無かった。

このような現状に鑑み、広島大学日本語史研究会は、本資料の輪読を進めてきた。

本資料の書誌・諸本・成立・内容等は、すべて右の諸文献の記述に譲り、学界における今後の研究のため、ここに本資料の翻刻を公にする次第である。

大方のご批正を願いたい。

（以上、佐々木 勇 記）

二、翻 刻

（凡例）

一、本翻刻は、広島大学蔵福尾文庫『善正太子物語』原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。

一、翻刻にあたり、全行に、原本に対応する通し番号を付した。

一、原本の配行・字詰を保ち、仮名遣いも底本のままとした。振り仮名も、片仮名または平仮名で、原本の通り翻字した。

一、原本には、○印の区切り点が存する。本行右・中央・左に加点されるが、その位置を定めたいものが含まれるため、翻字では、・で統一した。

一、原本は、∞で濁音を標示している。この符号は、声調を標示していないため、一様に（濁）とした。

この濁点には、「しゆ」^ㇿ「きやう」^ㇿ「ちう」^ㇿの如き加点が存する。これらは、「しゆ」「きやう」「ちう」を「ま」とまりとして捉え、その全体に濁点を加点したものと考えられる。

一、その他、翻字に際し、注が必要と思われる点は、当該箇所には、「」に入れて記した。

一、本翻刻は、佐々木勇・刀田絵美子・河野里沙・中塚恵理・遠城千晶・井浪真吾・釋就実・児玉奈月・岡本絵里・高尾千尋で作成した。

一、原本閲覧・写真撮影ならびに翻刻の許可を賜わった、広島大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。

- 1 抑^{ソモク}三千世界に事さまくおほけれ共あはれ
- 2 のすへのめてたきはたんせんのほうの御すまひ
- 3 なり然^{シカレニ}に胡國に并三万七千六百國その内に
- 4 さいしやう國ありあるしをは月さう天輪^{テンリンシヨウワ}聖王
- 5 と申・きさきをは・浄王^{シヨウワウ}ふにとてそ・申たて
- 6 まつりける・けんわうにてましませば井の國
- 7 まて・あふき奉^{カタマツル}る事かきりなし・一人の
- 8 王子^{ワウシ}まします御名をは善正太子とそ・申
- 9 ける十六歳^{ササ}にならせ給ふまで后も・そな
- 10 わりたまはす并國をたつねさせ給へ共きさき
- 11 に・ならせ給ふへき・美^ヒ人^ニもなし爰^コに東上國

12 のあるし善見王と申きさきをはあさうき
13 の宮とそ申ける・ひめみや一人おはしけるか
14 三國一番の美人にておはしますよしを
15 風のたよりに善正太子きこしめしおよ
16 はれ・うわのそらなる・戀風を御身にうけ
17 させ給ひて・御心も・うかれけるに公卿天上人
18 をちかつけ是より東上國への道ののりはい
19 かほとありけるそと御たつねありければ地下人
20 こたへて申やうおよそ東上國への道は三年
21 三月とは申せとも所・になんしよありて人
22 けんのかやう事まれなれは耽そんせさる由
23 を申上太子きこしめしてたとひ五年十年
24 に行道なりとも此地に・つ・かは・いかてか・ゆき
25 つかて・あるへきと・おほしめしそれをはよく
26 こぞ・した・めたまひけれある夕暮に大
27 裏をしのひ出させ給ひて・東のそらを・御
28 心あてにて・たどろくどあゆませ給ふさるほとに
29 大裏にはしんなうせさせ給ひぬとて・大王
30 きさきを・はしめとして公卿天上人百くわん
31 けいしやうにいたるまで此御事をなけかぬ人も
32 なかりけりさて太子は一人まよひゆかせ給ふ
33 ほとに・六やをんにさしか・り給ふ此野を見
34 わたし・たまへは道もなく雲よりほかははても

35 なしあきれて・た・せ給ふ處に歳のよわひ・
36 八十はかりのおきなかうへには雪をいた・き
37 こしにはあつさのゆみをはりはとのつへにす
38 かり立たりしか太子をつくくど・見たてま
39 つり此墅は人間のかよわさる處なり・こらう
40 やかん・のすみかへ・か・るいふなる御すかたとして
41 只一人きたらせ給ふはふしんにこそ候へと申上る
42 太子とりあへず・おほせけるは我は是西上國
43 のあるし天輪聖王の御子善正太子とは
44 なんちか事なり・はつかしなから事の子細を
45 かたるへし・東上國の大王の姫宮あしゆくふ
46 にんと申を風のたよりに・き・しより戀の
47 おもひにあくかれ・是までまよひきたりたり
48 おきなをなさけに此道を・たしかにをしへて
49 たひ給へと・せんしあれはおきなあはれにや
50 おもひけんさてはいたわしき御事なり是より
51 東上國へは三年三月に行つく道なり此間
52 なんしよ・あまたあり此墅をは六やをんと申て
53 道もなくはてもなき所なり・こらうやかん
54 みちくゝて人けんの・かよひならず又あんろくさん
55 と申山は天よりつるきふり地より火ゑん
56 もえあかりいづれも行事なしとくせん
57 と申は・しゆみにならふほとのかき山なりその

58 ふもとに・こんか川と申は・ひろさふかさ一万
59 余旬なり・かやうのなん所をは・いかてかゆかせた
60 まふへき・しかれとも西上國のあるしにて
61 ましませは巻物をもちて頭を・まいらせへくて
62 はたの御まほりにかけさせたまは、いかなるなん
63 しよなりともやすくと御とほりあるへきとて
64 左のたもとよりこんていの巻物一くわん取出
65 太子に奉る太子うけ取せ給ひて御身にそ
66 かけさせ給ひけるさておきなは此道をゆかせ
67 給へとて御門の御てをひきまいらせ道ある
68 所に行せ給ふとおほしめせは・おきなは・いつくとも
69 なくうせにけりさて太子はおきなのをしへの
70 つる道のま、御幸なりける春はかすめる
71 山花ちるそらをうちなかめさせ給ひ秋は
72 さやけき月峯のもみちをうちなかめく
73 ゆかせ給ふほとに三年三月と申に東上國に
74 つかせ給ふはるかたひなれば御かたちもお
75 とろへ御心はへも・つかれさせ給へはあるかたわらに
76 た、すみ給ふか・西上國の大内の御事をも・なつ
77 かしく・おほしめしたされ御こしよりやう
78 ちやうを取出しし、丸さうふれんといふかくを
79 しはらく・あそはしける爰にはにふの小屋
80 より女房一人立出て太子にたつね申けるは

81 御身はいつくのいかなる人にてましますそいま
82 の御笛のかくは國の御門ならてはあそはさ
83 ぬかくをちやうもん申心をおとろかして
84 こそ候へと申太子きこしめされか、るてんしや
85 の身としてかくをき、しる事は此國の大内へ
86 まいる物にてやあるらんとおほしめし是は
87 西上國のしゆきやうしやなるか御けしやうの
88 くそくを・もちたり・もし大内ひめみやさまに
89 あひらんならば・まいらせあけへきよしいつ
90 わりからこそその給ひけれ彼女房も御ふへのかくを
91 承てた、ならぬ心得かやうの御事をも申
92 あけんとやおもひけん御けしやうのくそく
93 もちたまは、ひめみやへまいらせたまへとて
94 やかて太子の御そてを引て大内へこそまいり
95 けれ此おんなひめみやに申あくるやうこ、に
96 西上國のしゆきやうしやとてきたりけるか
97 御けしやうのくそくをもちたるよしを申
98 又旅宿のなくさきみてふへをふかせ給ふを
99 うけたまはりて候へはし、丸さうふれんのかく
100 すみやかにふかせ給ふさてはた、ならぬ御かたと
101 心得又御けしやうのくそくをももしは御
102 ゑひらんのためにこれまでくしてまいりて候
103 と申上あしゆくのみや此由をきこしめして

104 御むねうちさわき御かほにもみちをちら
105 させ給ひておほしめすやうさうふれんのかくは
106 つまこひのかくなり是は天下にする人まれ
107 なるを修行者ふきけるふゑのねはた、人
108 にはあるましくとおほしめし御ことはには
109 いたされす彼女におほせられけるは修行者
110 のけしやうのくそくあけ候へ御ゑいらんあるへき
111 よしおほせありければ彼女太子へまいりけん
112 御けしやうのくそく上給へあしゆくミヤの宮へま
113 いらせたきのよしを申太子ミヤなめによろ
114 こはしくおほしめしかうはゑのたへし
115 雪のうすやうとりかさね一首ヒトの哥カをそ
116 あそはしけり
117 花の香を風のたよりにき、しよりそ、ろにぬる、我か袂哉タモトと
118 遠山かたにおした、み松かはやう引むすひわ
119 たさせ給へは彼女請取ウケトリまいらせてやかてあしゆく
120 のみやへこそまいらせけるひめみや此たまつさ
121 をひらき御らんすれば御けしやうのくそくは
122 なしされはこそとおほしめしあわせられ
123 やかて御返哥ありける
124 我ワゆへにくちなんそでのなみたこそ
125 とひとはれてのあとノのきぬく
126 かやうにあそはされてこのたまつさの上をは

127 もとのことくつ、ませたまひて此女にたまわる
128 やかて太子にまいらせければひらき御らんして
129 夢かうつ、かとおほしめし御心の内の御よろ
130 こひたとへんかたそなかりけるやかて姫ヒメみや
131 よりこかうの御つほねをいたさせ給ひていま
132 のしゆきやうしやを此ゆふへはつほねにと、め
133 給へ御けしやうのくそくこまやかにめし
134 あけられへきよしおほせありければ太子も
135 こかうのつほねまでそ御まいりありけるその
136 日もほとなく暮ければ太子も姫宮ヒメミヤへまいら
137 せ給ふやかて・みたいもうちとけてひよくれん
138 りのかたらひもあさからさる御ちきりなりさる
139 ほとに天に口なし人のさへつりとてやかて
140 大王きこしめしつけられさても修行者
141 姫宮ヒメミヤへまいる事あさましくおほしめし
142 やかて・しさシいにおこなわるへきとて
143 あらけなき物のふともにせんしを・くたさる、
144 さるほとにもの、ふせんしを承てやかて
145 ひめみやへみたれ入七重ユの屏風八重ヒヤウフの
146 みす十重ジュウのきちやうををしやふりひめみや
147 をからめまいらせすてにかるせんとする處に
148 上王ふにん・きこしめし・目のまへにて・うき
149 事をみんよりも・こらうやかんのすめる・たん

172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150
せんのほらへすてさせ給へとありければ大王・とも
かくもとのせんしにまかせ・いまの修行者をも
からめとりて・ふにんの御こしひとつにのする
物のふとも御こしを中にさしあけいたわり
153 申事もなく・ゆくほとに七十五日の道なれとも
154 いそきはしるま、三十余日と申にたんせん
155 ほとへそ・つけ給ふ御こしを中よりおろし
156 すてにかひしまいらせんとする處にひめみや
157 さもうつくしき御手を合られ物のふとも
158 のなさに我等 二人のいのちをたすけ
159 よと・おほせありければさもあらけなき物
160 のふなれ共心より五十余人は一度に
161 こゑをあけてそ・なきにけりさて から
162 こしをかき東上國へそ帰りけるさて太子
163 あしゆくふにんは御夢のさめられたること
164 くにてあきれてこのほらに一夜をあか
165 させ給ふいにしへはあやりやうらのしとね
166 ひやうとらのかわをふませ給ひし御身
167 なれ共此岩屋の内には木のはまれなるに
168 たかひにこしをかけられなみたならては御とき
169 になる事はなしかくてもあらぬ御身なれ
170 は太子はみねにのほらせ給ひつま木を
171 ひろわせ給ふふにんは谷にくたらせ給ひて

195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173
ねせりをつみとかく御いのちをたすかり給ふ
こそあはれなれ・されはこらうやかんもかなし
くやおもひけんあるひは木のみあるひはつま
176 木くち木をくわへ此いわやのほとりまてま
177 いりなみたをなかしひれふしたるあり
178 さまたとへんかたそなかりけるされ共うき
179 世の中の御なくさみにやふにんた、ならぬ
180 御心いてきさせ給ひて月日ほとなくつもり
181 すてに王子御たんしやうならせ給ふいにしへ
182 ならは大臣 ounkaku 天上人百くわんけいしやう
183 にいたるまで此御事をよろこひあつかふへ
184 きにかたしけなくも太子御手をそへられい
185 たきあけまいらせらるればたまをのへたるか
186 ことくなる王子にてまします・やかて御名をは
187 善高太子とそ御申ありける・その年暮て
188 又あくる年のころ・くわいききたらせ給ひて
189 太子むまれさせ給ふ此御名を善真太子
190 とそ御つけありける・かくて二人の王子さま
191 ほとなく御せいしんありける太子御子さまを
192 つくくと御らんしてふ にんにむかひて・お
193 ほせありけるは子とも此ほらにてにもかくにも
194 なさん事おろかなるへし我本國へかへりて御
195 こし車をそうし・御むかひにまいらん・それまで

196 此いわやにてまたせ給へとおほせければふ
197 にんはなみたをおさへておほせけるは太子もろ
198 ともに此王子たちをあひしてあるさへすみ
199 うきにほん國にかへらせたまは、三年三月の
200 ゆきき七八年のおくるへしそれまでみつ
201 から一人・いて・まちつけまいらせん事かた
202 ければた、此いわやにて我等もろともにとにも
203 かくにもならせ給へとと、め給ふ太子かさねて
204 おほせありけるはさうして生うまを請物じやうぶつそらを
205 かけるつはさ地をはしるけた物かうかの
206 うろくつまても子をおもふ道はまよふと見えて
207 候は此太子ともを世にたてすしていたつらに
208 なさん事おろかなり七八年の間もいくほとあらし
209 只是にてまたせ給へとしきりにおほせければ
210 ふにんちからなくおほしけんさらはとてたち
211 わかれ出させ給ふたかいに・御をも・かけを見お
212 くり見かへり給ひてゆくもと兩人まるも御なみた
213 よそのそてまでしはれけり太子いそかせ
214 給ふほとに二年三月と申に西上國につき
215 たまふ本の大裏へいらせ給ひてこ、かし
216 こを御らんすれ共人をとませすのきのひわたは
217 やふれおちつるちおほるひま見えて
218 只いにしへのかたちはかりこそこのりける

219 や、ありて老人一人出あひ御門いざかどを見たて
220 まつりてなみたをこほしける御門此大内の
221 あるしはなにとならせ給ふそとおほせければ
222 老人こたへて申やう大王は善正太子うせ
223 給ひし後ふにんもろともに御なけきよに
224 こへてふにんはあしたのつゆときえ給ふ大王
225 ひとかたならぬ御なけきに御世をすてられ
226 光林寺クワリンシと申山寺におこなひすまして
227 御座やあるよしをくわしく申あくるそのとき
228 太子は我こそもとの大王の御子よ只今はへ
229 きたりたるよし光林寺へ申上へきよし
230 おほせられければおきなも我こそもとの
231 御で、にまいりたる物にて候へとよろこひいそぎ
232 光林寺へそうもん申大王も世にふしきに
233 おほしめしやかて大内へうつらせ給ふそのま、
234 太子に御そゐあつて天下のよろこひ是
235 には過しとそきこえける是につゐて大王
236 あさうきふにんの御事をおほしめし出され
237 よろこひの中なのなけき是なりさるほとにむ
238 ちやうねんわうはたんせんのほらにおはします
239 ふにん太子さまの御むかひのために御こし
240 くるまのかさりさまくなりされは大臣シくわん
241 にんまて御むかひのよいいとそきこえける又

242 たんせんのほらのふにんきみの御事をあげ
243 くれおほしめし此ま、年月をくらん事
244 まちとをなるへしとて太子さまとつれまいらせ
245 られち、の御あとをたつねはやおほしめし
246 すてに出させ給ひしかしゆ（通）のかけ一かのなかれ
247 をくむ事もたしやうのゑんときけはすみ
248 うかりつる岩屋も心あるらんとおほしめし
249 一首（シ）はかくそあそはしける
250 すて、行岩屋なりとも人とはは
251 たえすこたへよみねの松風と
252 うちゑひし給ひていとけなき御子さま
253 をあとさきにともなひ給ひていと物ほそき
254 御足にわらくつをさしかけさせたまひて千
255 里（リ）万里にをもむき給ふ事うき世の中
256 のあはれなりそのま、山をこへ谷をくたり
257 里に出れはのさわをわたらせ給ひて人の
258 すみかへ立よらせ給ひてそてこゑをめ
259 さるれとも人のなさけのうすければ御（カマ）こ（カ）事
260 た、せ給ふ事もなくとかく日を暮しゆ
261 かせ給ふほとに六やをんとやらん申はらへ
262 まよひ出させ給ふ此原（ウ）は人けんのかよふ事
263 まれなれはた、けた物か道ならては見えず
264 此原をたよりにてたとりゆかせ給ひけるか

265 ならわせたまわぬたひなれば御心もつかれ
266 させ給ひて風のこ、ち行き給ひてくさ木の
267 ねをまくらにしふし給ふ太子おほせありけるは
268 此墅はこらうやかんのすむ所なれば一足もゆ
269 かせ給へかしといさめ給へはやうく御まくらを
270 あけられたとらせ給ふほとに六やをんの
271 墅中なるしやくせんたんの木の本へつかせ
272 給ふ・その夜は木のねをまくらとして
273 二人の御子さまをまへうしろにいたわり
274 給ひて・物すくもあかさせ給ひけるこそ
275 あはれなれさて其日も風の御こ、ちおも
276 りければ善高太子（カ）は人里（リ）に出給ひて
277 ときれううけて御いのちをのへさせ給ふ
278 つきの日は善真太子（シ）ときれうこいに
279 出させ給ふこそまことにあらぬ御さまなれさて
280 ふにんは御心もよわりきわませ給ひ
281 て二人の御子さまの御手（テ）をとりて御むねに
282 をしあてられ今生（コ）のなこりは是までなり
283 我きへての後西上國（ウ）へたつねあたりち、
284 きみにあひたてまつり此よしをくわしく
285 かたりまいらせへしあさからざりし御ち
286 きりの中なれはとてしさゐの御哥（ウ）
287 なくなみたつゆときえなん此原（ウ）の

288 くさのかけまてきみを見ましやと
 289 あそはされもあへすあしたのつゆとそきへた
 290 まふさて二人の御子さま御は、のさうの御手に
 291 すかりつき給ひて我等いとけなき物ともを
 292 すて給ひていつくにゆかせ給ふそとこゑ
 293 もをしますなき給ひて御しかいにいたき
 294 つき二三日はそのまゝにておはしけるかや、ありて
 295 善高太子^{センカウ}善真太子^{センシン}にむかひておほせあり
 296 けるはさても此ま、此墅にてはてん身なら
 297 ねはいさやち、のゆくゑをたつねまいらせん
 298 とては、のしかいにはくさひきかけまいらせ
 299 て心ほそくも只二人御あとを見かへり／＼ゆか
 300 せ給ふ御事こそ世にこえたる御かなしみ
 301 なれみねにあからせ給ひ谷にくたらせ給ふ
 302 とてもち、戀しやは、戀しやと御こゑ
 303 もをしまれすさけひ給へはあまひこのこ
 304 たふるを人のあるかとうちたのみあくかれ
 305 行せ給ひけるこそあはれなれさて西上國
 306 には御むかひの御こしくるまかさりと、のへて
 307 御門めされ大内をうち出させ給へは近國^{キンコク}の人々
 308 もみな御とも申さんとしける御門と、め
 309 させ給へはいまの御とものかす三千余人
 310 とそきこえける御こしくるまをとはせいそ
 311 かせ給ひけるほとに六やをんちかくなりぬれは
 312 もの、ふとも百人はかり御さきはしりにそ
 313 行けるさるほとに太子二人は此山の口まで
 314 まよひ出させ給ひしか御こしくるまのをと
 315 人のこゑ／＼けしからすたかけれはにわか
 316 おとろかせ給ひてとあるこかけにしのはせ
 317 給ふ御すかたを物のふとも見つけまいらせ
 318 此あたりは人間のかやう事まれなりこらう
 319 やかん又は天魔^{テンマ}はしゆんか御門^{ミカド}の御なりを
 320 さまたけんためにたはかりけるかとてすてに
 321 かいせんとしければ太子こへをあけておほせ
 322 けるは是は東上國の物なるか西上國へち、を
 323 たつねてまよひ行なりいのちをたすけ
 324 よとさけはせ給ふこゑを御門きこしめし
 325 つけられあやしくおほしけんくわん人を
 326 ちかつけいまの物のふともなやますしゆ
 327 きやうしやを御こしちかくまいらせよとせん
 328 しありければくわん人やかて御子さまを御
 329 こしちかくまいらせけるやかて御門太子さまに
 330 むかひておほせけるはなんちはいつくのいかなる物
 331 いく／＼行そと御たつねありければ善高太子^{センカウ}
 332 かしこく申ありけるは是は東上國あしゆく
 333 ふにんの御子なるか西上國の善正太子ち、

334 にてましませは御あとをししたひてまよひ
335 きたりたりとおほせければ大王ころひお
336 ちさせ給ひて二人の太子をさうの御ひさに
337 かきのせ給ひて我こそち、の善正太子にて
338 あれさては、のふにんはと・とわせたまへはたん
339 せん【別表】のほらをはは、もろともに立出て西上
340 國をたつねておはせしか千里万里の道
341 なれはしたひくゝに御心もつかれさせ給ひ
342 て六やをんとやらん申墅中しやくせんたん
343 の木の本にてきへうせ給ひぬそのときお
344 ほせけるは我等はち、きみにあひまいらせはふにん
345 きみに今生フシイカにていま一度見候へまいらせて
346 のちとにもかくにもならはやおもふま、生シヤウ
347 死無常シムシヤウのならひ・かいなければこゝにてむな
348 しくなるなり来世ライセイにてはかならずおなし
349 はちすのゑんとなりまいらせんおもひわすれ
350 たまわすはあとをとめてたひ給へと し
351 せいよみ給ひしをさいこにてそのま、きへ
352 させ給ひけるとこまゝと御物かたりあり
353 ければきみをはしめたてまつり御ともの人々
354 けし以下以下にいたるまで一度にわつとこゑを
355 あげなかせ給ふ御ありさまを見る人きく
356 人あはれもよほさぬ人はなかりけりかくて

357 太子二人を御こしにのせまいらせ給ひて
358 六やをんしやくせんたんの木の本へたつね
359 つかせ給ひてふにんの御しかいはさためてとら
360 おほかめもひきちらすたんとおほしめすに
361 けた物も物あはれをしりけるかこらう
362 やかんのたくひしやくせんたんのあたりに
363 なみゐて御しかいをしゆこしけるおもむき
364 見えて・ゐけるか・御なこりをしけに見かへり
365 くさ木のおくへそ・しのひける御門御しかいを
366 御らんすれば花のやうなる御すかたもかわり
367 はて御まなこねふらせ給ふことくなりける
368 をひきかけたまひしくさはを取のけ御
369 門御しかいに・いたきつかせ給ひて・御なけき
370 中くとかくにおよはさる・ふせいなりや、
371 あつてあたりになつとき御ひしりを・しやうし
372 まいらせしやくせんたんの木のえたにて御しかい
373 を・ゆふへのけふりとなしまいらせ給ふ・なかはに
374 天よりしうんたなひきをんかくきこへ来て
375 さうの・てんたう・はたをさし・廿五のほさつ
376 たちはこゑくゝに・きよくをなしまいくたり
377 ふにんの御しかいを・けふりの内より・すくわせ
378 給ひて天にあからせ給ふ御かたち・たちまち
379 ひかりさし佛ブツ軀キにならせ給ふ御まなこは

380 秋の月のわのことし御くちひるははちすの
 381 かたふき・むねは八やうのれんけ・ひらけさ
 382 うの御手のゆひは十羅刹女とけんし
 383 二の御あし文殊普賢とあらわれさせ
 384 給ひてそのま・天にあからせ給ひける
 385 御ありさまをきみ御らんしてこれまでと
 386 おほしめしわれもほとけをねんしおなし
 387 はちすに・むまるへしと・おほしめし
 388 た・れ・そのとき御ともの大臣以下にいたる
 389 まて・おのく本國へかへり大王に此よし
 390 可申・我はみやこに・かへりても・よしなけれは
 391 修行の道におほしめしたらんとて御くし
 392 のもとゆひはらわせ給へは御ともの人々
 393 このま・修行の道に御とも申さんと
 394 きみしきりに本國へかへれと・おほせあり
 395 けれは・ちからなく本國へかへる人もあり・其
 396 ま・もとゆひをはらひて修行に出る
 397 人もあり心くの身あつかい・世にたくひな
 398 きありさまなりさて君はたつとき・ひ
 399 しりにあわせ給ひて御くしそりをとさせ
 400 給ひてはなのたもとをすみにぞめ御名
 401 をは法蔵比丘とぞ申けるさても三界
 402 の衆生の・わかれも我か・ことくにぞ・おもふ

403 らんとぞおほしめし六十願を・おこし
 404 衆生さいとのためにこかうしゆあつて
 405 長世のひくわんをとけ阿弥陀佛とならせ
 406 給ふ二人の太子は観音勢至とならせ給ふ
 407 あしゆくふにんは衆生の四百四病のや
 408 まふをちして衆病・疾除身心安樂の
 409 願をたて給ひて東方淨瑠璃世界を
 410 くすりのつほとも・たせまふらせ給ふこの
 411 ために阿弥陀の六十願を十二願わけて
 412 薬師 如来にまいらせ給ふ阿弥陀は西方に
 413 とひうつらせ給ひてさとりをまよひをも
 414 もらさず安樂世界へむかひとらせ給ふ事
 415 まことにありかたき御事現世安穩
 416 後生善處のひくわんなれはきやう ちう
 417 さ 誰も御折言あるへきなり
 418 天文七年 卯月五日書之
 419 不審之事雖多任本に
 420 書写之訖愚筆比興云々
 421

(代表 佐々木 勇・広島大学教授)